

# Camp

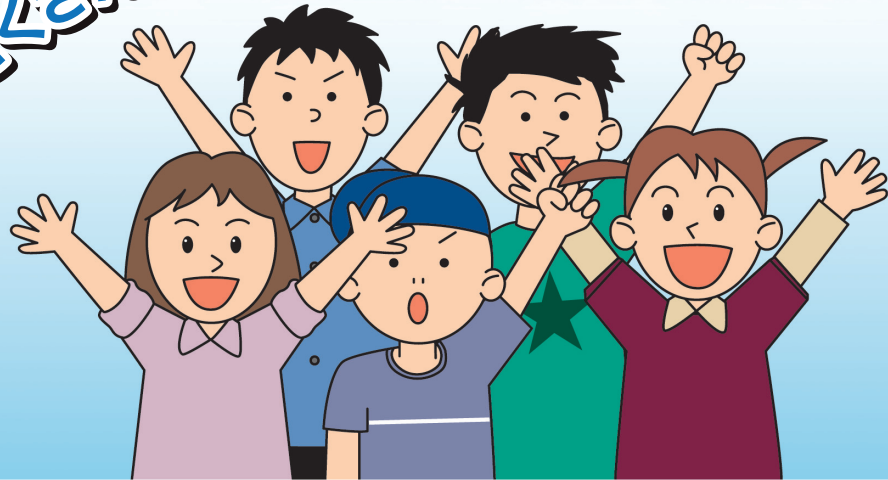
## Data Book 2008



キャンプがわかる!

# キャンプが子どもを育てます

キャンプは遊び。  
でも、人生に必要なことが  
たくさん学べる遊びです。



## ！ 自然そのものが もたらしてくれる学び

自然の環境は、人間の五感に働きかける不思議な刺激に満ちています。これらの刺激は、私たちの感動や驚き、知的好奇心や探究心を呼び起こします。そして実物に触れる経験は、「知識」を生きることに関与する「知恵」として定着させることに役立ちます。

## ！ 集団による活動・共同生活が もたらしてくれる学び

キャンプの小グループでの生活や活動においては、一人ひとりが自主的・主体的に行動し、協調性のある態度や行動をとることが求められます。キャンプは、他者との深い交流の中で信頼感を育て、よりよい人間関係のあり方を学ぶ機会を提供してくれます。

## ！ 自然の中での生活や活動が もたらしてくれる学び

自然の中での素朴な生活や活動は、向上心や想像力、環境保全や自然愛護への積極的な態度を育てます。また、キャンプで得ることのできる知識や技術は、危険を回避し安全を確保する能力、自らの安全は自らが守るという意識を高めます。

## ！ 新しい体験が もたらしてくれる学び

キャンプでのふだん味わうことのできない新鮮な体験は、これまで気が付かなかった自分の長所や能力を発見し、短所を知る機会となります。そして、新たな興味・関心を引き起こし、生涯を通じた健全で豊かなライフスタイルの形成にも役立ちます。

# キャンプは何日間もすれば効果的？

## 体験期間は子どもの成長に影響するのか？

キャンプの期間については一般的に長期の方が効果が高いといわれていますが、実際何日間以上あればよいのかはよく分かっていません。国内外で短期と長期のキャンプの効果を比較した研究は行われていますが、それぞれのキャンプの条件の違い、測定内容・方法の違いなどから、明確な答えはまだ見つかっていません。海外の研究では、多くのプログラムで行われた研究を総合して分析し、プログラムの長さの影響や最適な長さについて特定する試みもされており、一般的には長期の方がより効果的、また長期プログラムでの効果の方が、その後の生活においても持続するという結果が報告されていますが、最適な期間については明確な言及はされていません。また、日本では1週間程度のプログラムを長期と呼びますが、アメリカなど海外のキャンプは長期と呼ぶのは3週間以上のものであることが一般的です。

## 一週間のキャンプが効果を上げる目安

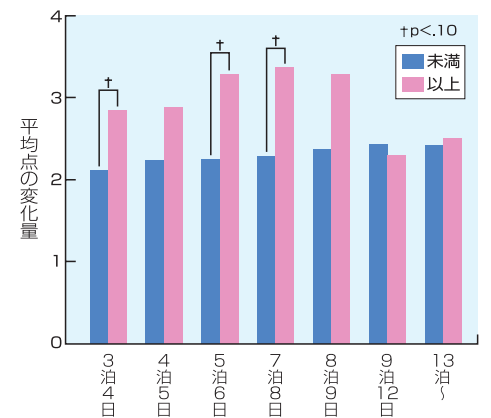
平成19年度に行われた調査においては、多くのキャンプは短期のプログラムでしたが(表1)、短期間のキャンプからそれ以上の長期間のキャンプとの効果の比較を行いました(図1)。その結果、徐々に効果は高くなりましたが、9日間まで期間を伸ばしたところで、短期間と長期間の差はなくなりました。つまり、8日間以上のキャンプが、より高い効果をあげる上で一つの目安となると考えられます。

キャンプは、身体的にも社会的にも非日常的な環境で行われるため、生理的・社会的な環境適応にある程度の時間が必要であること、また目的達成のために環境学習や生活体験、野外スポーツなど多様な活動に時間を費やしたキャンプの方が全体として効果が高い結果が出ていることから、キャンプの効果を期待するには、ある程度まとまった期間が必要であることがうかがえます。せっかくのキャンプという特別な機会なのですから、自然や活動、仲間とのふれあいなど、キャンプならではの体験が十分にできる時間を確保したいですね。

表1 調査対象キャンプ(期間別) ※数字はキャンプ数

キャンプ期間	数
2泊 3日	32 (55%)
3泊 4日	7 (12%)
4泊 5日	7 (12%)
5泊 6日	2 (4%)
6泊 7日	4 (7%)
7泊 8日	1 (2%)
8泊 9日	1 (2%)
11泊12日	1 (2%)
14泊15日	1 (2%)
30泊31日	1 (2%)

図1 期間ごとにグループ分けした全体効果の比較

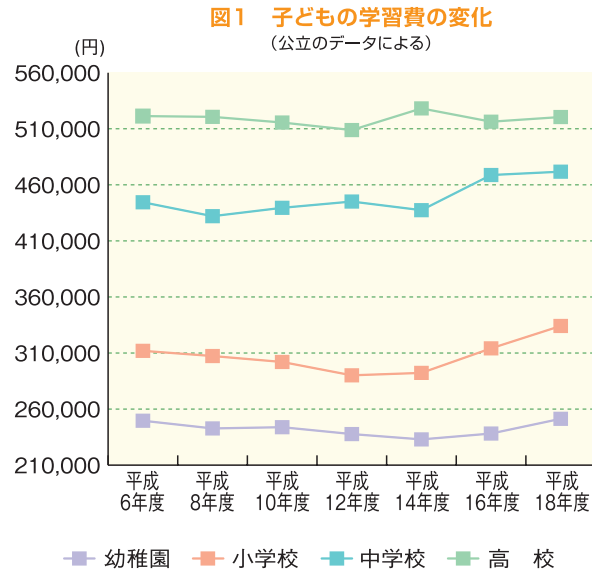


このデータは、平成19年度文部科学省委託事業「青少年の意欲を育む体験活動に関する調査研究」において行われた「我が国のキャンプスタンダードの開発に関する調査研究」報告書『キャンプのちから』より抜粋したものです。

親が子どものたくましい成長を願って様々な学習や教育のために使う費用は、学校教育費、学校給食費、学校外活動費に分けられ、キャンプなどの野外活動の費用は学校外活動費に含まれています。

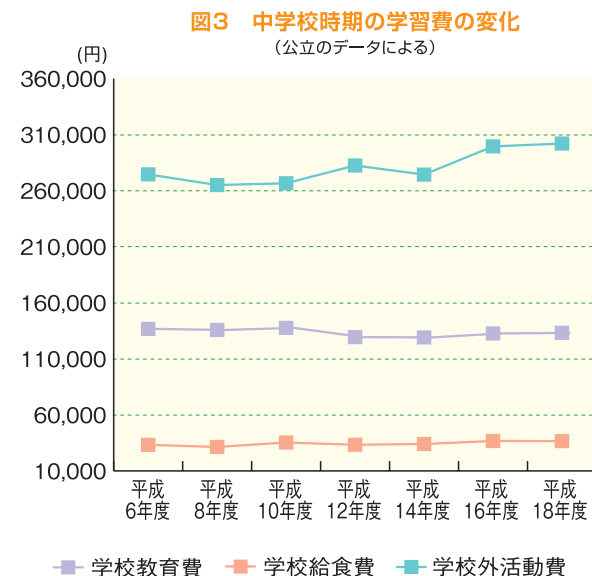
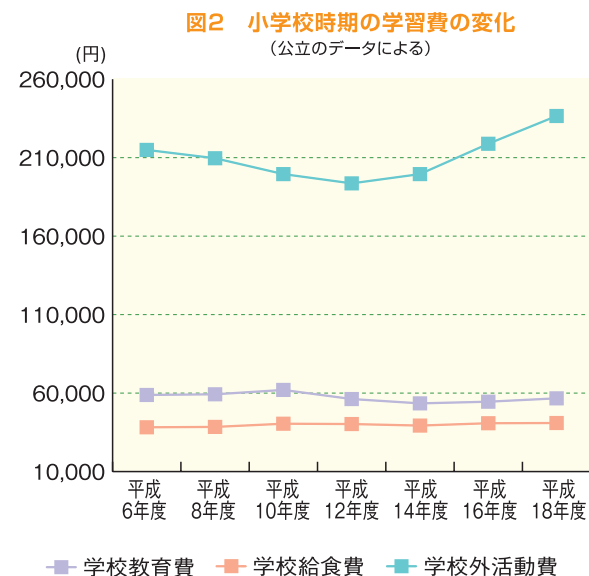
## 親が子どもの教育のために使う費用は、最近どのように変わってきたのでしょうか？

図1を見ると、平成14年度から幼稚園、小学校、中学校において学習費が微増していることがわかります。



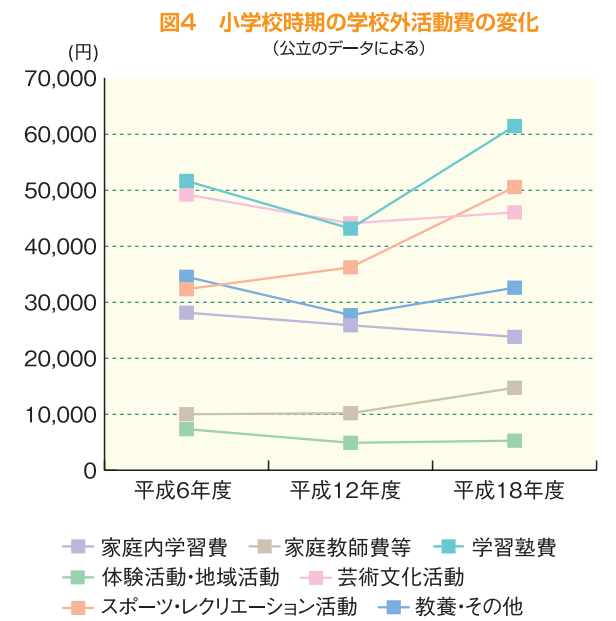
## 学習費の微増は「学校外活動費」が増えたことによるもの

図2と図3を見ると、子どもの「学習費」を「学校教育費」「学校給食費」「学校外活動費」の3つに分けて見ると、「学校教育費」と「学校給食費」の変化はありませんが、「学校外活動費」は平成12年度から微増していることがわかります。



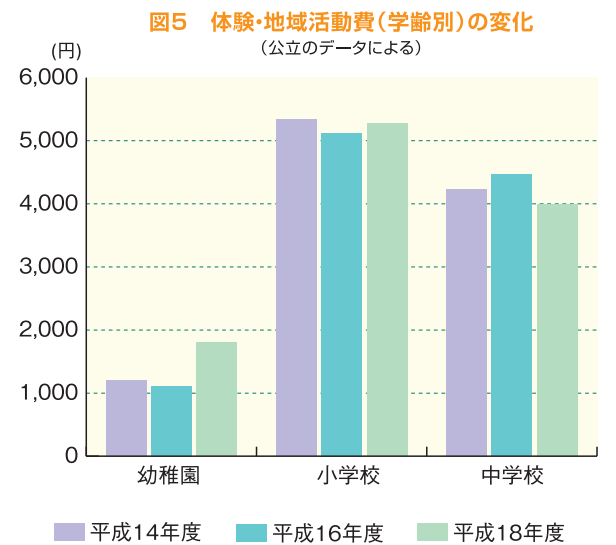
## 学校外活動費の微増は「学習塾費」と「スポーツ・レクリエーション活動費」が増えたことによるもの

「学校外活動費」をさらに詳しく項目ごとと見ると(図4)、平成12年から「学習塾費」と「スポーツ・レクリエーション活動費」が増えていることがわかります。また、キャンプに最も関連が深いと考えられる「体験活動・地域活動費」は、残念ながら、支出が抑えられたまま横ばいの状況が続いています。



## 今後の体験活動躍進のキは「幼児と小学校低学年」

支出が抑えられている「体験活動・地域活動費」ですが、それだけに着目し、「学齢別」に見てみると(図5)、「幼稚園」年代で支出が増えていることがわかります。このことは、ここ数年顕著になってきた、キャンプ参加者の低年齢化の裏付けと見ることもできるのではないのでしょうか。



文部科学省の調査によると、平成14年度から親が子どもの学習や教育にかかる費用の中で、「学校外活動費」が増加し、その要因は「学習塾費」と「スポーツ・レクリエーション活動費」によるものであることがわかります。この背景を考えると、平成14年度は学習指導要領が改定され、学校週5日制が毎週実施されるようになった年です。また、子どもの体力低下が問題視され、子どもの体力向上のための総合的な方策(答申:平成14年度中央教育審議会)が進められた年でもあります。このように、学校内での教育活動以外に、さらに学校外での教育活動が求められるようになっています。



# キャンプ なるほど データ

キャンプは、自然環境、活動内容、指導者、仲間などのさまざまな影響を受けて、心身の成長や健康にとってもよい効果があることがわかってきました。そこで、いくつかの研究からわかってきた「なるほど」の発見について紹介します。

## 「本物」の自然体験がエコ・ピープルを育てる!!

今日、キャンプが環境教育の優れた実践の場であることは多くの人に理解されていることではないでしょうか。キャンプに参加することによって、環境に対する知識、態度、行動が向上することが既に明らかになっています。ところが、一概にキャンプ体験と言っても、さまざま自然とのかかわり方があり、果たしてどのような体験が環境に配慮した態度や行動を育てるのは、まだわかっていません。

### 「自然との触れあい」が環境行動に影響する

現在の環境行動に影響を及ぼした過去の決定的な体験について明らかにするSignificant Life Experiences (SLE)という研究の手法があります。これらの研究によれば、子どものころの教育、家族にも勝り、自然体験が有効であることが報告されています。ところが、上述のとおり一概に自然体験といってもいろいろあり、キャンプでどんなことをしたらよいかまで知ることはできません。そこで、さらに自然体験の中身について明らかにするために、このSLEの手法を過去のキャンプ体験に応用し、長年にわたり長期キャンプを経験した成人68名を対象に調査しました。

その結果、キャンプ経験者が成人後にとる環境行動に影響を及ぼした決定的な体験が、登山、沢遊び、及び自然の中にいること自体を含む「原生自然体験」、不便や工夫など野外生活に特徴的な経験を表す「野外生活体験」、野生生物との遭遇などを表す「野生生物体験」、環境に配慮したことを表す「環境配慮体験」に分類されることがわかりました。自然について学ぶような「環境学習体験」は、個別のインタビューでは強いインパクトを与えたものの、全体では共通して決定的な体験とはなりません。さらに、上述

の4つの体験のうち、「原生自然体験」が成人後の環境行動に最も強く影響を及ぼしていることが明らかとなりました。

このことから、キャンプ中に環境に配慮した行動をとったり、自然について学んだりすることはとても重要なことですが、将来大人になったときに、子どものころ参加したキャンプでの「本物」の自然との触れあいがとても重要であることがわかります。

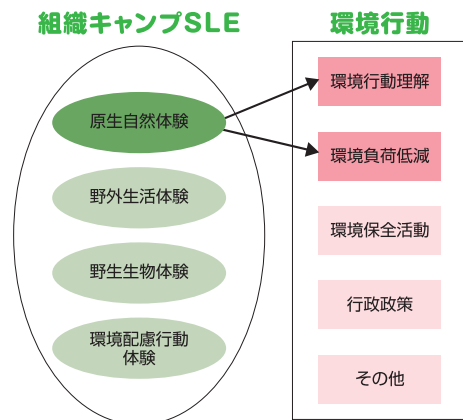


図1 組織キャンプSLEと環境行動との関連

### どんな体験が環境リテラシーに影響するのか

続いて、同じようにキャンプ中のどんな体験が直後の環境リテラシーに影響を及ぼすのかを、経済のマーケティングに用いられるMeans-End (Chain) Analysis(手段-目的連鎖法)という方法で調べてみました。冒険教育、環境教育、レクリエーションなどさまざまなプログラムを含む長期キャンプ参加者40名(小学校5年生～高校3年生)を対象に、キャンプで自然について感じたことや学んだことと、その要因となる体験についてラダーリング法という記述式により調査しました。その結果、全体としては、林業プログラム、エコクッキング、水のプログラムなどの

「環境学習体験」が、環境に対する知識、態度、行動への発展していくことが明らかとなりました。ところが、対象を小学生25名に限定してみると、上述のSLEの研究と同様に登山や沢遊びなどの体験で、環境に対する気づき、畏敬、知識、態度など、さまざまな環境リテラシーを獲得していることが明らかとなりました。このことは、小学生年代は、知識や技能などよりも、感覚的自然認識が重要とされている環境教育の学習段階とも一致した結果です。つまり、短期的な環境リテラシーの獲得の方法は、対象年齢によっても異なるのです。

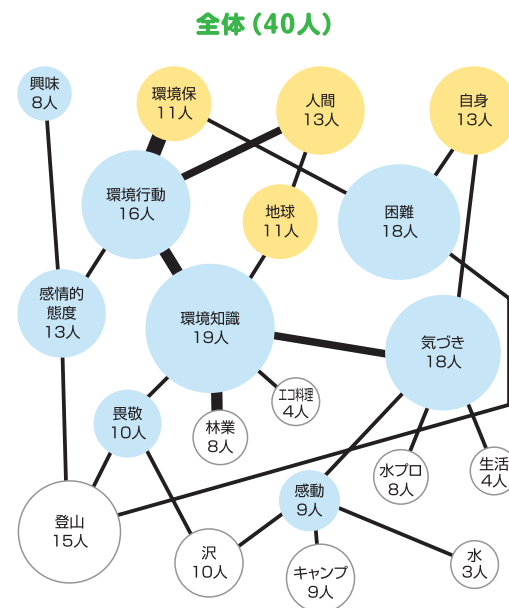


図2 キャンプ参加者の環境リテラシーとその要因

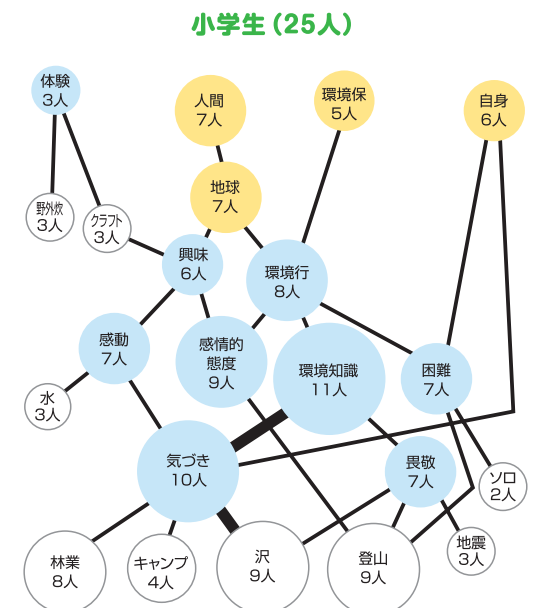


図3 キャンプ参加小学生の環境リテラシーとその要因

2つの研究をまとめると、短期的な環境リテラシーの獲得には、これまでの多くの報告同様に、「環境学習体験」が有効であるといえます。一方、大人になってからの環境行動や、小学生の環境リテラシーの育成には、本物の自然とふれあうような「原生自然体験」が重要であると考えられます。つまり、キャンプでは、対象年齢に応じて、これらの体験をバランスよく導入することが必要であるといえるでしょう。

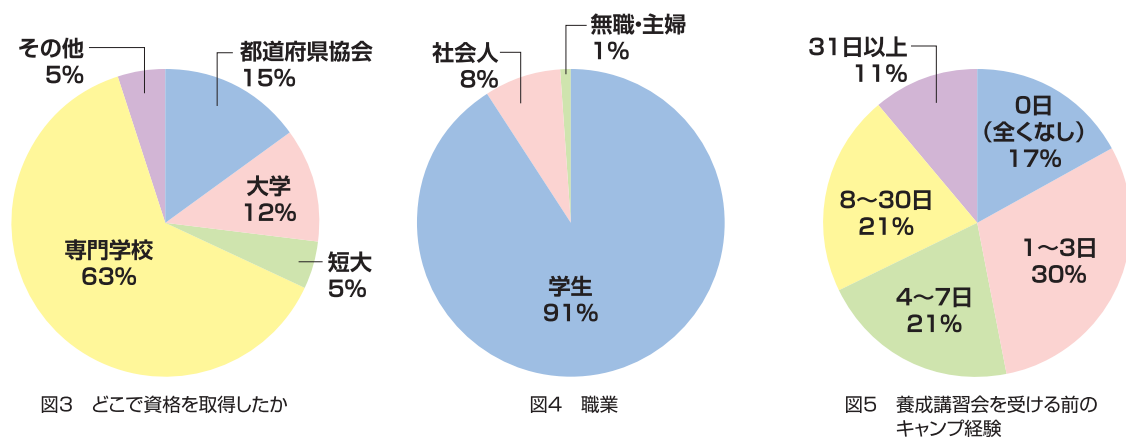
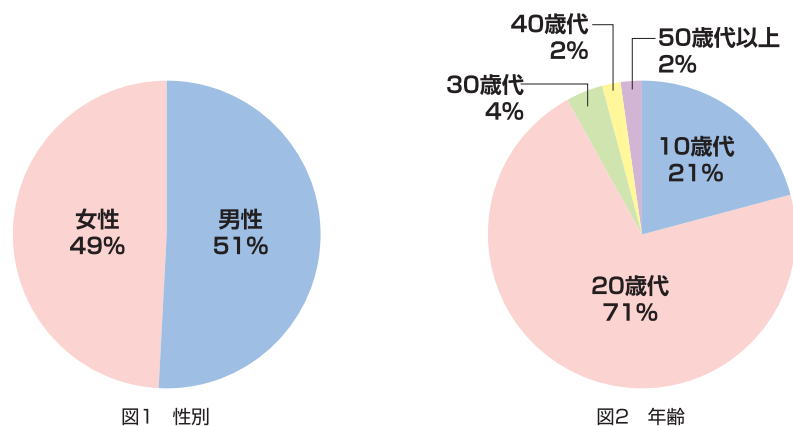
出典：岡田成弘、岡村泰斗、飯田穂、降旗信一「少年期の組織キャンプにおけるSignificant Life Experiencesが成人期の環境行動に及ぼす影響—花山キャンプを事例として—、野外教育研究、12-1：27-40,2008.

出典：岡田成弘、岡村泰斗「組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果とその要因」、未発表論文

# (社)日本キャンプ協会公認キャンプインストラクター資格 資格取得者はこんな人が多い

## 1 資格取得者の概況

この概況調査は、(社)日本キャンプ協会公認キャンプインストラクター資格登録時に行われたものであり、2006年度、2007年度ともに500名ずつを対象としました。



対象者の内訳については、2年間とも同じような傾向を示しており、性別では男女の割合が約半数ずつとなっていました(図1)。また、最も多かったのは、年齢別では20代(図2)、養成団体では専門学校(図3)、職業では学生(図4)となっていました。また、養成講習会を受ける前のキャンプ経験については、1~3日が最も多くなっていました(図5)。最近のキャンプインストラクター資格取得者の傾向としては、キャンプ経験の比較的少ない20代の学生であると言えます。

## 2 キャンプで体験したい活動 BEST10

2006年度	
第1位	野外炊事
第2位	星空観察
第3位	キャンプファイアー
第4位	カヌー(川・湖)
第5位	テント泊
第6位	スクーバダイビング
第7位	登山
第8位	釣り
第9位	自然観察
第10位	レクリエーションスポーツ

表1

2007年度	
第1位	キャンプファイアー
第2位	星空観察
第3位	野外炊事
第4位	カヌー(川・湖)
第5位	テント泊
第6位	スクーバダイビング
第7位	釣り
第8位	登山
第9位	レクリエーションゲーム
第10位	自然観察

表2

男性	
第1位	野外炊事
第2位	キャンプファイアー
第3位	カヌー(川・湖)
第4位	星空観察
第5位	テント泊
第6位	釣り
第7位	登山
第8位	スクーバダイビング
第9位	自然観察
第10位	マウンテンバイク

表3

女性	
第1位	星空観察
第2位	野外炊事
第3位	キャンプファイアー
第4位	カヌー(川・湖)
第5位	テント泊
第6位	スクーバダイビング
第7位	アウトドアパーティー
第8位	自然観察
第9位	レクリエーションゲーム
第10位	登山

表4

キャンプで体験したい活動については、2年間とも野外炊事、星座観察、キャンプファイアー、カヌー(川・湖)、テント泊が上位5位までに選ばれていました(表1、表2)。さらに、6~10位を性別で見ると(表3、表4)、男性は6位が釣り、7位が登山、8位がスクーバダイビング、9位が自然観察、10位がマウンテンバイク、女性は6位がスクーバダイビング、7位がアウトドアパーティー、8位が自然観察、9位がレクリエーションゲーム、10位が登山となっていました。ここでは、男女に若干違った傾向が見られ、男性は釣りやマウンテンバイクといった、アウトドアで体力を使い、一人でも自分のレベルでその活動を楽しむことができ、また仲間とでも楽しむことのできる活動を希望し、女性は仲間とともに自分たちでつくる喜びを味わうことができたり、みんなでわいわい楽しい時間を過ごすことができたりする活動を希望する傾向にありました。

# 青少年の体験活動等と自立に関する実態調査

～平成18年度調査と平成19年度調査を比較して～

独立行政法人国立青少年教育振興機構では、平成18年度より、青少年教育関係者が実施する事業の企画立案、運営等に資するため、全国の小学校、中学校、高等学校の900校の児童・生徒約18,000人と保護者約16,000人(小学生のみ)に対し、「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」を行っています。

本稿では、平成18年度と19年度の調査結果を比較しながら、青少年における体験活動の実施状況や自立に関する意識の現状の概要を紹介します。なお、上記の報告書はすべて電子データ化(PDF)し、当機構のホームページ『事業報告書検索』(http://www.niye.go.jp/houkoku\_srch/index.php)で公開していますので、調査結果の詳細につきましてはそちらをご覧ください。

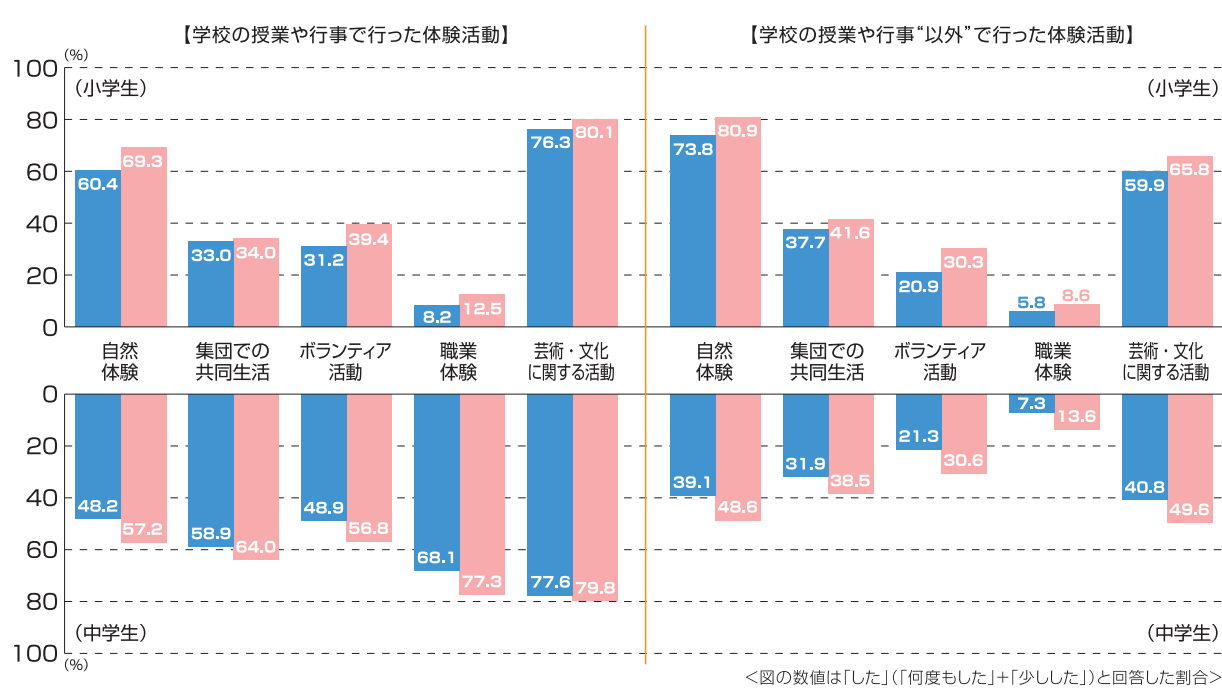


## 学校内外での体験活動の実施状況はどのように推移しているのでしょうか？

「学校の授業や行事」と「学校の授業や行事以外」で行われている体験活動として、小学生(1～6年生)と中学生(2年生)における主な体験活動の実施状況を見ると、小学生では学校内で「芸術・文化に関する活動」、学校外で「自然体験」を実施している割合が最も高くなっていました。一方、中学生では学

校内外を問わず「芸術・文化に関する活動」を実施している割合が最も高く、次いで学校内の「職業体験」が高くなっていました。これらの結果を、平成18年度の調査結果と比較すると、体験活動を実施している割合は全体的に増加していることがわかりました。

図1 学校内外における体験活動の実施状況 (単位は%)



<図の数値は「した」「何度もした」「少しした」と回答した割合>

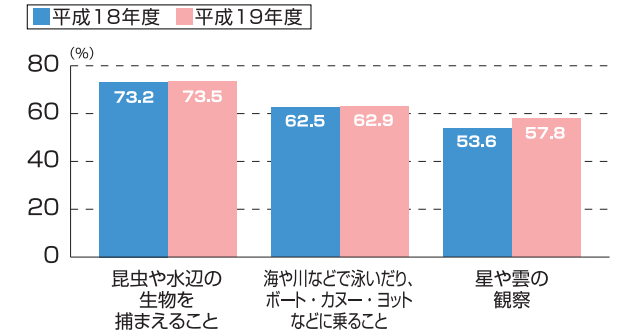
- 自然体験**：山や森、川や海など、自然の中でできる様々な体験をすること
- 集団での共同生活**：キャンプや合宿などで、グループで1泊以上一緒に生活すること
- ボランティア活動**：報酬を求めず自ら進んで社会のために役立つ活動をする
- 職業体験**：商店や企業等で実際の職業を体験すること
- 芸術・文化に関する活動**：音楽、美術、工芸、書道、演劇、ダンス、国内外の伝統芸能などを鑑賞したり、自分でやったりすること



## 自然体験のうち、どのような活動が最もよく行われているのでしょうか？

小学生(1～6年生)が実施した自然体験(17項目)のうち、上位3つの活動を見ると、実施した割合が最も高かった活動は「昆虫や水辺の生物を捕まえること」で、次いで「海や川などで泳いだり、ボート・カヌー・ヨットなどに乗ること」、「星や雲の観察」の順になっていました。平成18年度と比べると、上位2つの活動ではほとんど差がみられませんでした。星や雲の観察は若干増加していることがわかりました。

図2 自然体験の実施状況 (単位は%)



<図の数値は「した」「何度もした」「少しした」と回答した割合>

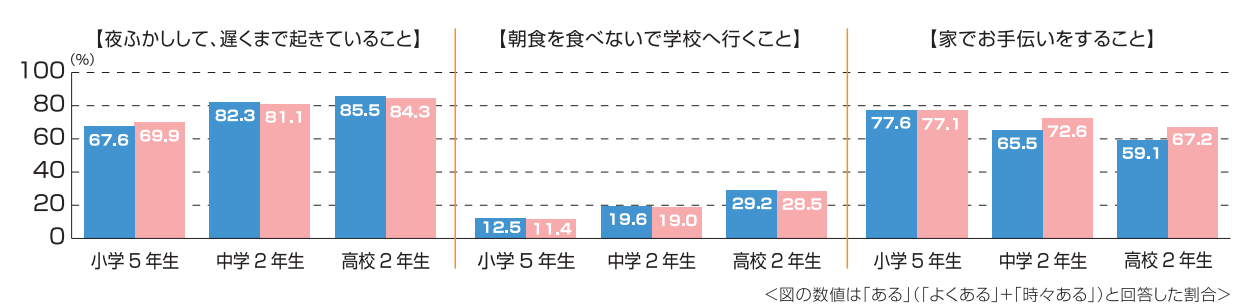


## 青少年の普段の生活はどうなっているのでしょうか？

小学生(5年生)、中学生(2年生)、高校生(2年生)の生活習慣の状況を見ると、「夜ふかして、遅くまで起きていること」や「朝食を食べないで学校へ行くこと」が「ある」と回答した割合は学年が上がるにつれて増加する傾向がみられました。その一

方で、「家でお手伝いをする」と「ある」と回答した割合は学年が上がるにつれて減少する傾向がみられました。しかし、平成18年度と比べると、中学生、高校生とともに家でお手伝いをする割合が増加していることがわかりました。

図3 普段の生活習慣の状況 (単位は%)



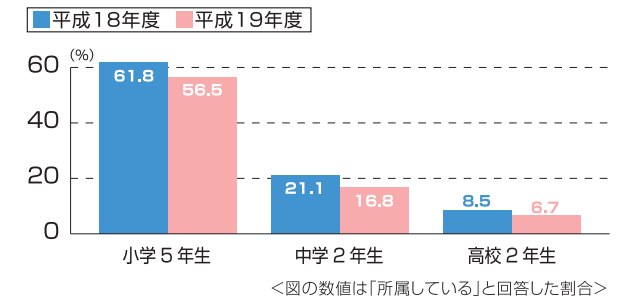
<図の数値は「ある」「よくある」「時々ある」と回答した割合>



## 青少年団体への加入状況はどのように推移しているのでしょうか？

小学生(5年生)、中学生(2年生)、高校生(2年生)における青少年団体への加入状況を見ると、青少年団体への加入率が最も高かったのは小学生で、学年が上がるにつれて減少する傾向がみられました。平成18年度と比べると、すべての学年において加入率が減少していることがわかりました。

図4 青少年団体への加入状況 (単位は%)



<図の数値は「所属している」と回答した割合>

**青少年団体**：「子ども会やボーイスカウトなどの青少年の団体」や「野球やサッカーのチームやスポーツ少年団などのスポーツ団体」等



(社)日本キャンプ協会オフィシャル・レポーターに聞く

# あなたの2008・夏

## Q1 あなたはこの夏、いくつのキャンプにスタッフとして参加しましたか？



「スタッフとして参加したキャンプの数」を見ると、「2~3つ」と回答の方が31%と、最も多くなっています。また、半数の方が複数のキャンプに参加していたことがわかります。

「なし」と回答した方も29%と多くなっていますが、このうち、およそ半数の方は「夏以外に実施したキャンプに参加した。」との回答が記されていました。

## Q2 そのキャンプでのあなたの役割は？



「キャンプでの役割」を見ると、「プログラムスタッフ」として参加した方が29%と、最も多くなっています。また、「その他」と回答したがおよそ1割程度ありますが、その内容は「主催者側の責任者」「医師」「看護師」などでした。

## Q3 そのキャンプで一番苦労したことは何ですか？

第1位	天候(の変化)への対応	20.7%
第2位	キャンプ中の安全管理(安全確保)	18.4%
第3位	キャンパー(参加者)への対応	17.2%
第4位	スタッフ、グループカウンセラー(グループリーダー)との意思の疎通	16.1%
第5位	スタッフ、グループカウンセラー(グループリーダー)の確保・トレーニング	9.2%

キャンプで一番苦労したこととして、「天候(の変化)への対応」「キャンプ中の安全管理(安全確保)」が上位に入りました。

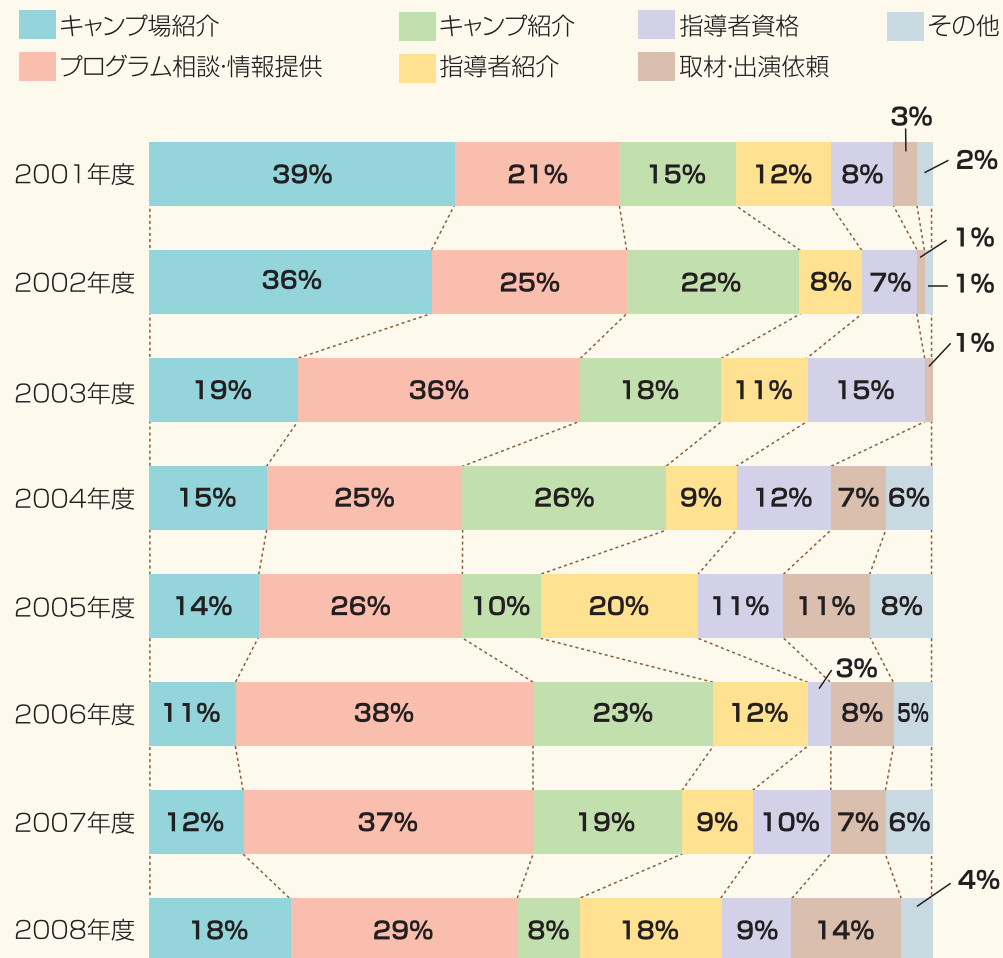
2008年の夏は、全国的に落雷や局地的な大雨に見舞われる日が数多くありました。この結果はそのことを物語っていると言えるのではないのでしょうか。

### オフィシャル・レポーターとは…

日本キャンプ協会の事業や刊行物について、会員のみなさんから定期的にご意見を聞かせるために設けた制度です。協会事務局より送付するアンケートに答えていただき、その声を協会の各種事業に反映するというものです。都道府県協会推薦の会員と自ら応募した会員、約200名で構成されています。

キャンプインフォメーションセンターにみる

# 相談内容の変化



上の図は、「キャンプインフォメーションセンター」に寄せられた相談内容を、開設から8年間にわたって示したものです。「キャンプ場紹介」の減少が目につきますが、これはインターネットによる「キャンプ場検索」が普及・充実したためと考えられます。同様のことは「キャンプ紹介」にも見受けられます。インターネットを利用してキャンプの紹介・告知をしている団体等が増えてきている現れでしょう。相談件数が減少する中でも、「キャンプ場紹介」では、「バリアフリー」や「大人数収容」といったキーワードを含む相談が多くなっています。また、「キャンプ紹介」では、「長期キャンプ」に関する相談が増えてきています。ここ数年、相談件数の一番多い「プログラム相談・情報提供」では、「安全」に関する相談や資料請求が多くなっています。楽しいキャンプにするために、「安全」が必要不可欠であるとの認識が高まることは、歓迎すべきことではないのでしょうか。

キャンプインフォメーションセンターについては、14ページをご参照ください。

# 良いキャンプには良い指導者が必要です

日本キャンプ協会ではキャンプ指導者の養成をしています。それは、質の高い自然体験のためには、良い指導者が不可欠だからです。資格を持っている指導者は全国に約2万2千人。全国の様々なアウトドアシーンでキャンプ指導者が活躍しています。



全国のキャンプ場数  
**2,130カ所**

平成17年度社会教育調査より

全国のキャンプ人口は520万人+α

オートキャンプ人口(520万人)に、学校や社会教育団体で行われている自然体験活動の参加者を加えたものをキャンプ人口ととらえます。(まだ正確な数字を得ていません。)(レジャー白書2008より)

## 都道府県別指導者数

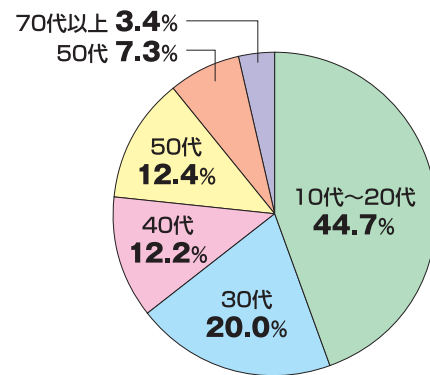
ベスト5

1. 東京都 **6,681** 名
2. 埼玉県 **1,829** 名
3. 愛知県 **1,536** 名
4. 大阪府 **1,242** 名
5. 神奈川県 **1,034** 名

1県あたり平均 **505** 名

※ 各県協会に所属する指導者数を表しています

## 指導者の年齢構成

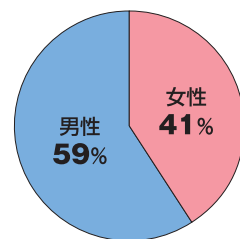


## 資格別会員数

- キャンプディレクター1級 **1,158** 名
- キャンプディレクター2級 **2,462** 名
- キャンプインストラクター **18,601** 名
- 合計** **22,221** 名

※ キャンプインストラクターは20時間、ディレクター2級は80時間、ディレクター1級は160時間の学習内容を修了した指導者です。

## 登録指導者の男女比



(2009年3月現在)

# キャンプ・インフォメーションセンターから

社団法人日本キャンプ協会では、キャンプのことなら何でも相談に応じる「キャンプインフォメーションセンター」を開設しています。2008年の相談実績から、キャンプの傾向を見てみましょう。

2008年4月から2009年3月の相談実績

## 相談内容のベスト5

- ① プログラムの相談 情報提供 ..... **29%**  
(キャンプの企画・運営についてのアドバイス、アウトドアでのゲームやキャンプファイアーについて、安全管理、野外生活技術について、資料請求など)
  - ② キャンプ場紹介 ..... **18%**  
(個人の条件に合ったキャンプ場、団体でのプログラムができるキャンプ場など)
  - ③ 指導者紹介 ..... **18%**  
(学校や地域キャンプの企画・運営、キャンプファイヤー指導、アウトドアスキル講習会等の講師など)
  - ④ 取材・出演依頼 ..... **14%**  
(連休・長期休暇に向けたアウトドア特集や安全特集の取材、アウトドアスキルの指導・助言のためのテレビ出演など)
  - ⑤ キャンプ紹介 ..... **8%**  
(子どもが参加できるキャンプ、スキーのプログラムや団体を紹介)
- \* その他 ..... **13%**  
(資格や事業に関する問い合わせ、協会HP・発行物等に関する問い合わせなど)

2008年は、取材対応、キャンプ場紹介、指導者紹介の占める割合が昨年、一昨年にならぶようになりました。また、集計開始以来、初めて民間企業やマスコミからの相談件数が、個人からの相談件数を上回りました。徐々にではありますが、これまでキャンプとの関わりが薄かった方々のキャンプへの注目が増してきたことがうかがえるのではないのでしょうか。

## ■ キャンプインフォメーションセンターへのお問い合わせは

Eメールで ..... [info@camping.or.jp](mailto:info@camping.or.jp)

電話で ..... **03-3469-0233** (月~金/10:00~18:00)

FAXで ..... **03-3469-0504**

手紙で ..... 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1  
国立オリンピック記念青少年総合センター内

専門のコーディネーターがお答えいたします。

Camp Data Book 2008

2009年3月31日発行

編集 社団法人日本キャンプ協会 調査研究委員会

平野吉直 岡村泰斗 甲斐知彦 月橋春美 永吉英記 林綾子 戸室勇児

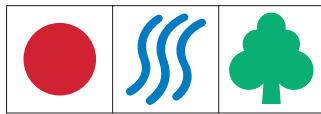
発行者 野澤巖

発行所 社団法人日本キャンプ協会 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立青少年センター内  
TEL: 03-3469-0217 FAX: 03-3469-0504  
E-mail: [ncaj@camping.or.jp](mailto:ncaj@camping.or.jp) URL: <http://www.camping.or.jp>

印刷 大日本印刷株式会社

発行 4,000部





NCAJ

National Camping Association of Japan